

## 大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：佐久間 啓彰（教育政策科学コース）

<p><b>■ 研究題目</b></p>
<p>不登校経験者への支援体制から見た通信制高校の管理運営に関する研究 —教員の専門性・人員配置に注目して—</p>
<p><b>■ 研究代表者・分担者 氏名</b></p>
<p>佐久間 啓彰（教育政策科学コース）（代表者）</p>
<p><b>■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）</b></p>
<p><b>1. 目的</b></p> <p>2018年度の全国の不登校児童生徒の割合は、小学生 0.70%、中学生 3.65%、高校生 1.63% となっており、小中学生の割合はともに過去 6 年間上昇を続けている（文部科学省，2019）。不登校児童生徒の割合に上昇がみられる中、小中学校で不登校を経験した者の進学先や高校で不登校となった者の転編入先として大きな役割を担ってきた公教育機関・制度が、高等学校の通信制課程（以下、通信制高校）である。2011 年度に文部科学省が三菱総合研究所に委託し、通信制高校を対象に実施した調査では、自校の生徒のうち、小・中学校、前在籍高校のいずれかで不登校経験を有する者の割合が 3 割を超えると回答したのは 64.8%、5 割を超えるとしたのは 39.0%であった（株式会社三菱総合研究所，2012, p.26）。阿久澤（2015）が指摘するように、通信制高校は不登校経験者の学び直しの間としても機能している。</p> <p>2016 年 9 月 30 日に策定、2018 年 3 月 23 日に一部改訂された「高等学校通信教育の質の確保・向上のためのガイドライン」では、「実施校の設置者は、不登校経験や中途退学その他多様な課題を抱える生徒一人一人の事情に寄り添ったきめ細やかな指導を行うことができるよう、教員配置の充実を図ること」（文部科学省，2018①）とある。また、このガイドライン策定のために発足された「広域通信制高校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議」による「高等学校通信教育の質の確保・向上方策について（審議のまとめ）」では、通信制高校の目指すべき方向性を満たすために「各学校においては、計画的な研修等を通じて教職員の資質、専門性の向上を図る」とある（文部科学省，2017, p. 19）。教員の人員配置や専門性に注目がなされている。</p>

しかし、通信制高校の人員配置や教員の専門性に関する研究は充実していない。通信制高校に関する研究では、教員に着眼した研究が少ない。特に教員の専門性に関しては、辻野・榊原(2016)が指摘するように、「初等・中等教育段階の『教員』が暗黙の前提とされがち」(辻野・榊原, 2016, p. 169)であり、特別支援教育以外の他の校種や専門学科に関する「専門性」論は周縁化・等閑視されている。通信制高校は後期中等教育段階ではあるが、その特殊性により既存の教員の専門性に関する研究の射程に入っていないのが現状である。

以上から、通信制高校は多様な背景、特に不登校経験を持つ生徒を受け入れるためにどのような管理運営を行っているか、教員の専門性に注目して明らかにすることが本報告の目的となる。

## 2. 実施内容

学びリンク株式会社発行『通信制高校があるじゃん！ 2019-2020』に掲載されている私立・株式会社立広域通信制高校のうち、現在、学生募集を実施している102校(私立：85校、株式会社立：17校)の管理運営に詳しい方(校長、教頭、副校長など)を対象に、郵送調査法及びWeb調査法(質問事項は同様。どちらか一方から返送いただく)で調査を実施した。回収数は32校(回収率：31.4%)であった。

本報告では、その質問事項の中から教員等の配置について及び教員の専門性についてのものを分析の対象とする。

## 3. 結果

### 3.1. 教員等の配置について

教員等の配置について、年齢層及び常勤・非常勤別に構成を伺った。結果は表1のようになった。

すべての私立・株式会社立通信制高校を含むデータではないため断定はできないが、今回の調査から私立・広域通信制高校の教員構成について以下の二点のことが言える。第一に、35-39歳以外の年齢層では、非常勤教員の人数が常勤教員の人数を上回っているように、全体として非常勤教員の割合が高いということである。第二に、特に60歳以上の教員の割合が高いということである。常勤教員のみで見た場合も15.9%と依然として高く、文部科学省(2018②)による平成28年度の「私立高等学校教員の年齢構成」の60歳以上本務教員(常勤教員)の割合10.6%と比較しても高い割合となっている。

### 3.2. 通信制高校教員の専門性について

「通信制課程の教員としての専門性(他の校種や課程とは異なる教員としての知識や技術、心構え)とはどんなものだと思いますか。あなたの考えを具体的にご記述ください。

(特になし、思い浮かばない場合はその旨をお書きください。)」という質問への回答を自由記述で求めた。その回答を定性的コーディングによる帰納的アプローチで質的に分析を行った。

回答の中には、生徒に関して「様々な事情を抱えている」、「多様な生徒」などの記述が多く見られた(有効回答 30 校のうち 10 校)。そのため、まずは教員がどのような「様々な」、「多様な」生徒を想定しているかを具体化することとした。そして、その生徒たちに対応するために求められる教員の専門性を明らかにしていくこととした。よって、教員が想定する通信制高校の生徒像に関するコードと教員の専門性に関するコードを分けて分析を行った。その結果、生徒像に関しては 2 カテゴリー、7 サブカテゴリ、16 コード、教員の専門性に関しては 4 カテゴリー、11 サブカテゴリ、36 コードが抽出された。その結果を表 2・表 3 にまとめた。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリを〈 〉、コードを〔 〕で表記する。

〈学力の高い生徒〉以外のサブカテゴリを見ると、〈不登校経験や傾向を有する〉、〈障がいや病気を有する〉というように、通信制高校の生徒は学校生活や家庭環境において困難を抱えていると想定されていることがわかる。通信制高校の教員はこのような生徒像を想定した上で、教員の専門性を考えていた。

通信制高校の教員の専門性に関しては、【通信制課程で教える上で必要な知識や技能】、【生徒を受け入れ対応する能力】、【距離感を意識して生徒一人ひとりと向き合う】、【思いや経験を持った指導】というカテゴリが浮かび上がった。特に〈柔軟に対応する能力〉、〈生徒への理解力〉、〈生徒に寄り添う能力〉、〈耳を傾ける力〉から成る【生徒を受け入れ対応する能力】が特に強く意識される傾向にあった。また、【通信制課程で教える上で必要な知識や技能】を見ると、〈教科を教える力〉といっても、レポートやスクリーニングという通信制課程特有のシステムから、〔添削の技術〕や〔スクリーニングの工夫〕といった、特別な指導力が求められることにも注目すべきであろう。

#### 4. 考察

以上のことから、通信制高校の教員の人員配置や専門性について二つの可能性が指摘できる。

第一に、60 歳以上の教員の割合の大きさと、専門性の構成概念の一つである【思いや経験を持った指導】から、通信制高校の教員は豊かな人生経験や教員経験を持った人物が多く、またそのような人材が求められている可能性がある。

第二に、専門性の構成概念として【生徒を受け入れ対応する能力】が挙げられることと、その比率の大きさから、通信制高校の教員は高校の教員の中でも特殊な専門性意識を持っている可能性が示唆された。竹本・高橋(2011)により、高校の教員は「教科指導」を教員の専門性と捉える傾向があることが明らかにされている。本報告とは手法は異なるため単

純な比較はできないが、通信制課程の教員は特殊な専門性意識のもと、職務を遂行していると考えられる。

## 5. 今後の課題

今後の課題として三つ挙げる。第一に、本研究の関心である「不登校経験者への支援体制」への注目が不十分である。本報告では、教員の年齢層や雇用形態、専門性に注目することで、通信制高校教員に求められる知識や技能の一端を明らかにすることができた。しかし、そのような力量を持つ教員や、スクールカウンセラーなどの専門職がどのように配置され連携しているかなどの体制に関して広く明らかにするまでには至らなかった。通信制高校がどのように不登校経験者を支援しているかを考察することは、他の校種や課程での不登校経験者への支援に対する示唆となると考える。第二に、本研究では通信制高校の教員の専門性についての検討が不十分である。竹本・高橋(2011)のように尺度を用いる、通信制高校の類型によって比較検討するなどの発展が望まれる。第三に、教員の職能成長にも注目する必要がある。OJTの過程や教員研修などに関して質的に迫る必要があると考える。

## 謝辞

私立及び株式会社立の広域通信制高校の方々にはお忙しい中質問紙ご協力の依頼を出させていただきました。そして、ご協力いただきました32校の担当者の方々には、貴重な回答をいただきました。大変参考になりました。

また、事前調査として仙台育英高校に訪問調査をさせていただきました。ご対応いただきました加藤雄彦理事長、中嶋豊教頭をはじめ、教職員の方々には大変お世話になりました。

記して感謝申し上げます。

## 参考文献

阿久澤麻理子他(2015) 「通信制高校の実態と実践例の研究 ―若者の総合的支援の場としての学校のあり方―」

株式会社三菱総合研究所(2012) 「平成23年度『高校教育改革の推進に関する調査研究事業』 定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究 報告書」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/05/29/1321486\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/05/29/1321486_02.pdf) (2020.2.11 最終確認)

竹本弥生・高橋智(2011) 「『教師の専門性』意識の検討：小学校・中学校・高校教師への質問紙調査から」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』 62(2) pp. 143-151

辻野けんま・榊原禎宏(2016) 「『教員の専門性』論の特徴と課題 ―2000年以降の文献を中心に―」 『日本教育経営学会紀要』 第58号 pp. 164-174

文部科学省(2017) 「高等学校通信教育の質の確保・向上方策について(審議のまとめ)」  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/08/07/1388794\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/08/07/1388794_1.pdf) (2020.2.11 最終確認)

文部科学省(2018①) 「高等学校通信教育の質の確保・向上」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/1403642.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1403642.htm) (2020.2.11 最終確認)

文部科学省(2018②) 「学校教員統計調査-平成 28 年度(確定値)結果の概要-」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k\\_detail/1395309.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k_detail/1395309.htm) (2020.2.11 最終確認)

文部科学省(2019) 「平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/10/1422020.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/1422020.htm) (2020.2.11 最終確認)

表 1 私立・株式会社立広域通信制高校教員の年齢構成

	24歳以下		25-29歳		30-34歳		35-39歳		40-44歳	
	常	非	常	非	常	非	常	非	常	非
%	1.4	1.8	4.5	4.8	5.2	5.5	4.5	3.9	5.2	6.8
(人)	(12)	(16)	(40)	(42)	(46)	(48)	(40)	(34)	(46)	(60)

45-49歳		50-54歳		55-59歳		60歳以上		計
常	非	常	非	常	非	常	非	
3.6	4.5	3.3	5.7	4.5	7.6	6.1	20.9	100.0
(32)	(40)	(29)	(50)	(40)	(67)	(54)	(184)	(880)

(有効回答校数：30校)

※(常：常勤、非：非常勤を表す)

表 2 教員が想定する通信制高校の生徒像の構成概念

カテゴリ (記録単位数・%)	サブカテゴリ (記録単位数)	コード(記録単位数)
学校生活に不安を抱えている (11・37.9%)	不登校経験や傾向を有する(5)	不登校経験(4), 不登校傾向(1)
	集団生活が難しい(4)	いじめ・人間関係(2), 学校経験(1), 全日制に適応不可(1),
	学習面で遅れが見られる(2)	学習面での遅れ(2)
生徒の持つ特性 (18・62.1%)	障がいや病気を有する(6)	障害(4), 持病(2)
	生まれや家庭環境の複雑さ(6)	家庭環境(2), 経済状況(2), 生育歴(1), 外国籍(1)
	性格的背景(5)	精神的な問題(3), コミュニケーション不得手(1), 「卒業」が目標(その先ではない)(1)
	学力の高い生徒(1)	学力の高い生徒(1)

(総記録単位数：29)

表 3 通信制高校の教員の専門性の構成概念

カテゴリ (記録単位数・%)	サブカテゴリ (記録単位数)	コード(記録単位数)
通信制課程で 教える上で必要な 知識や技能 (11・15.5%)	通信制課程の知識・理解 (6)	通信制課程の知識(4), 非対面コミュニケーションへの理解 (1),補助金・奨学金の知識(1)
	教科を教える力(5)	教科の知識・指導力(2), 教材研究の工夫(1), 添削の技術(1), スクーリングの工夫(1)
生徒を受け入れ 対応する能力 (34・47.9%)	柔軟に対応する能力(10)	柔軟性(5), 変化に対する応用力(1), 生徒・保護者への対応能力(4),
	生徒への理解力(11)	生徒への知識・理解(6), 多様性の理解(2), 不登校への対応能 力(2), 精神疾患の知識(1)
	生徒に寄り添う能力(9)	寄り添う姿勢(3), カウンセリング・ ケアの意識(3), 言葉の使い方(1), 寛容力(1), 人間的資質(1)
	耳を傾ける力(4)	傾聴力(4)
距離感を意識して 生徒一人ひとりと 向き合う (9・12.7%)	一人ひとりに向き合う(6)	個に応じた対応(4), 一人ひとりとの 良好な関係(1), 個人への共感力(1),
	生徒との距離感への意識 (3)	生徒への距離感を意識(1), 人間としての線引き(1), 生徒に押し付け過ぎない(1)
思いや経験を 持った指導 (17・23.9%)	教育理念を持った指導 (12)	生徒を導く(6), 教え育む意識(1), 自発的に学習するための示唆(1), 自尊感情を高める(1), 結果をすぐに求めない(1), 子どもたちへの情熱(1), 通信制だからと馬鹿にしない(1)
	豊かな知識・経験(4)	幅広い知識(2), 豊富な教育経験(2)
	教員間のチームワーク(1)	教員のチームワーク(1)

(総記録単位数：71)